

大学機関別選択評価

自己評価書

平成26年6月

九州工業大学

目 次

I	大学の現況及び特徴	1
II	目的	2
III	選択評価事項C 教育の国際化の状況	3

I 大学の現況及び特徴

1 現況

- (1) 大学名 九州工業大学
- (2) 所在地 福岡県北九州市
- (3) 学部等の構成

学部：工学部、情報工学部

研究科等：工学府、情報工学府、

生命体工学研究科

研究院：工学研究院、情報工学研究院

附置研究所：該当なし

関連施設：附属図書館、保健センター、情報科学センター、マイクロ化総合技術センター、産学連携推進センター、機器分析センター、学習教育センター、宇宙環境技術ラボラトリー、ネットワークデザイン研究センター、先端金型センター、バイオマイクロセンシング技術研究センター、エコタウン実証研究センター、理数教育支援センター、先端エコフィッティング技術研究開発センター等

- (4) 学生数及び教員数（平成26年5月1日現在）

学生数：学部4,245人、大学院1,627人

専任教員数：362人

助手数：該当無し

2 特徴

本学は、九州北部の炭鉱事業の隆盛と明治 34 年の官営八幡製鐵所の開設を契機として、わが国の重化学工業の勃興期に工業化推進の中核的人材を養成する目的をもって、製鉄を中心とする北部九州の工業地帯に、明治40年に当時としてはめずらしい4年制の工業専門学校「私立明治専門学校」として設立された。その後、大正10年の官立明治専門学校、昭和 19 年の官立明治工業専門学校を経て、昭和 24 年に国立九州工業大学と変遷し、昭和 40 年には、工学部に新たに大学院工学研究科修士課程を設置し、昭和 63 年には、同博士課程を設置した。この間、北部九州のみならず、広く日本の産業化と社会発展に貢献すべき技術者の養成にかかわる高等教育機関として発展を重ねるとともに、工業地帯に位置する工業大学として教育と研究を通じ、

地域社会との連携を強化してきた。

昭和 61 年には、社会における情報技術の急速な進歩に対応するため、全国で最初の情報系総合学部である情報工学部を筑豊地区の飯塚市に新たに設置し、平成3年には、大学院情報工学研究科修士課程、平成5年には同博士課程を設置した。

その後、平成 12 年には、生命体のもつ優れた機能を工学的に実現することを目指し、独立研究科として大学院生命体工学研究科修士課程・博士課程を北九州市若松区に設置した。

そして、平成 16 年の国立大学法人化とともに国立大学法人九州工業大学となり、平成 20 年には、進歩の急速な社会経済の発展に迅速かつ弾力的に対処するための大学院・学部改組を行い、教育組織と研究組織を機能的に分離した学府・研究院方式を適用し、工学研究科を廃止して、工学府・工学研究院に、情報工学研究科を廃止して、情報工学府・情報工学研究院として設置するなど、現在、2学部、2大学院学府、1大学院研究科、2大学院研究院から構成された工学系大学として最先端の教育と研究を行っている。

なお、これまでに、5万人を超える卒業生、修了生を輩出しており、人材の育成に努めている。

また、本学は、わが国の産業発展のため、品格と創造性を有する人材を育成するという基本理念の下、教育と研究を通して次世代産業の創出・育成に貢献する個性豊かな工学系大学を目指し、以下のような特徴を有している。

- ① 開学以来の教育理念を基本とし、志（こころざし）と情熱を持ち産業を切り拓く技術者・知的創造者を養成するため、質の高い教育を実行する。
- ② 研究活動を常に活性化し、より多くの優れた研究成果を創出する。特に本学の各分野において、科学に裏付けられた融合技術や境界領域の創成を行う。
- ③ 教育・研究で培った知の公開と価値創造型もの創りを推進し、技術革新と社会を支えるイノベーションにつなげ、地域社会との連携と調和に務める。
- ④ 社会に対する大学の責任（University Social Responsibility）を重視し、大学に係るステークホルダーに対する説明責任を果たせる経営を行う

Ⅱ 目的

本学の目的は、第二期中期目標の「前文」において次のとおり示されている。

開学以来の理念である「技術に^{かんのう}堪能なる士君子」の養成に基づき、確固としたもの創り技術を有する志の高い高度技術者の養成を基本的な目標とする。教育・研究の高度化を図り、今後も「知と文化情報発信拠点」であり続けるとともに、「知の源泉」として地域社会の要請に応え、教育と研究を通して次世代産業の創出・育成に貢献する、個性豊かな工学系大学を目指す。

《基本的な目標の実現に向けて、以下の項目を設定する。》

【1. 教育】 研究と社会貢献を礎として、グローバル・エンジニアを養成する。

開学以来の教育理念を基本とし、志（こころざし）と情熱を持ち産業を切り拓く技術者・知的創造者を養成するため、質の高い教育を実行します。

【2. 研究】 世界トップレベルの分野を創出する。

研究活動を常に活性化し、より多くの優れた研究成果を創出します。特に本学の各分野において、科学に裏付けられた融合技術や境界領域の創成を行います。

【3. 社会貢献】 研究を通じた産学連携を基軸に活動を展開する。

教育・研究で培った知の公開と価値創造型もの創りを推進し、技術革新と社会を支えるイノベーションにつなげ、地域社会との連携と調和に務めます。

（学部・研究科等毎の目的）

別紙の通り

Ⅲ 選択評価事項C 教育の国際化の状況

1 選択評価事項C 「教育の国際化の状況」に係る目的

本学は第二期中期目標《資料C-i》において、下記のように教育の国際化に関する目標を示している。また、この中期目標を具体化するものとして「国際戦略」《資料C-ii》に国際化の3つの目的を掲げている。さらに、国立大学改革プランの一環として再定義した本学のミッションは、本学の社会的な役割として教育・研究の国際化の推進を掲げている《資料C-iii》。

《資料C-i：国立大学法人九州工業大学 中期目標（抜粋）》

大学の基本的な目標

【1. 教育】 研究と社会貢献を礎として、グローバル・エンジニアを養成する。

[教育の質の向上に関する目標]

②育成する人材を国際的通用性のある技術者として保証するため、

- (1) 国際基準に則った認定により教育の質を保証し、
- (2) 継続的な教育の質の向上を図るための体制を整備する。

3 その他の目標

(2) 国際化に関する目標

- ① 教育・研究面における本学の国際的認知性を高め、教育・研究力を向上させる。
- ② 学生の国際的コミュニケーション能力を高める。

国立大学法人 九州工業大学 ウェブサイト http://www.kyutech.ac.jp/information/plan/pdf_plan/tyuuki2.pdf

《資料C-ii：国立大学法人九州工業大学 国際戦略（抜粋）》

国際化の3つの目的

わが国の各大学において「国際化」が叫ばれており、政府の「留学生30万人計画」など、さまざまな計画が進められている。また、世界の各大学においては、外国人留学生の争奪戦が始まっている。その背景には、開発途上国の有能な人材を外国人留学生として受け入れ、「知の競争力」を向上させることにより、研究レベルの向上を図ろうとする狙いがある。このように、国内や欧米のみならず、中国などのアジア各国でも、世界最高水準の大学を目指して、急激に変化しつつある中、本学は「世界における九州工業大学」として、国際化をさらに推進する必要がある。本学は、基本理念である「わが国の産業発展のため、品格と創造性を有する人材を育成する」を念頭に置き、次の3点を目的として国際化を進める。

1. “Global Engineer” の養成

日本人学生、外国人留学生を問わず、本学が100年間にわたり蓄積してきたエンジニアリング教育を適用し、様々な分野における高度なエンジニアを生み出し、世界をリードする高度技術者、すなわち“Global Engineer”を養成する。

2. 有能な人材の確保による「知の競争力」の向上

先進国、開発途上国問わず、有能な外国人留学生や研究者を獲得することにより、教育・研究の高度化を図り、本学の「知の競争力」を向上させる。

3. 国際的プレゼンスの向上

本学が行う国際的な教育、研究の成果を世界に発信することにより、様々な分野で高い評価を得ることを可能にする。

《資料C－ii つづき： 国立大学法人九州工業大学 国際戦略イメージ（抜粋）》

九州工業大学 国際戦略イメージ



国立大学法人 九州工業大学 ウェブサイト http://www.kyutech.ac.jp/information/plan/pdf_plan/tyuuki2.pdf

《資料C－iii： 国立大学法人九州工業大学 国際化に関連するミッション（例）》

- ・マレーシアに設置した教育研究拠点の活用とグローバル展開
- ・国際共同研究に繋がる海外研修プログラム
- ・ダブルディグリー制度や諸外国の学生との相互派遣交流

2 選択評価事項C「教育の国際化の状況」の自己評価

(1) 観点ごとの分析

観点C-1-①： 大学の教育の国際化の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が広く公表されているか。

【観点到係る状況】

本学の教育の国際化に関しては、「【1. 教育】研究と社会貢献を礎として、グローバル・エンジニアを養成する。」ことを掲げている。この達成のために、「中期目標」でいくつかの目標を定めている《資料C-i》。これに対応して実行するためのふさわしい中期計画を定めている。たとえば、「国際的通用生のある技術者として保証する」という目的については、「国際的技術者教育の水準を満たすような教育システムを整備する」ように計画している。また「本学の国際的認知生を高める」ために、「大学間国際交流等を推進する」と計画している。さらに、「学生の国際的コミュニケーション能力を高める」ために、「能力別教育が実施可能な教育システムを整備する」と計画している《資料C-1-①-i》、《資料C-1-①-ii》。具体的な方針として、国際戦略が策定されて法人ウェブサイト等で公開している《資料C-ii》。

【分析結果とその根拠理由】

本学の教育の国際化の目的については、中期目標および再定義された本学のミッションにおいて明示している。また目的を達成するためにふさわしい計画を中期計画で定めている。具体的な方針も国際戦略として策定している。これらは法人ウェブサイト等を使って、広く公表していると判断する。

《資料C－1－①－i：国立大学法人九州工業大学 中期計画（抜粋）》

[教育の質の向上に関する目標を達成するための措置]

- ① 社会の要請等に適応した教育実施体制を継続的に点検し、必要に応じて 整備するとともに、入学定員についても継続的に点検し、必要に応じて見直す。
- ②－ア 「国際的技術者教育の水準」を満たすよう教育システムを整備し、該当する可能な認定を取得するよう準備を進める。
 - －イ 継続的な FD、SD 活動を推進し、職員間で改善成果の共有を図るための取り組みを進める。
 - －ウ TA を適切に配置し、教育的効果を高めるための方策を実施する。

3 その他の目標を達成するための処置

(2) 国際化に関する目標を達成するための措置

- ① 教育面・研究面等において、重点交流拠点大学を中心とした大学間国際交流等を推進するほか、海外での国際教育研究拠点を整備する。
- ②－ア 教育・研究活動における国際的コミュニケーション力を涵養するため、標準英語能力試験（TOEIC 等）によって学力段階を把握し、能力別教育が実施可能となるように教育システムを整備する。
- ②－イ 学生の海外派遣、留学生受入の支援及び環境整備等のグローバル人材育成を目的とした取組を実施する。

国立大学法人 九州工業大学 ウェブサイト

http://www.kyutech.ac.jp/information/plan/pdf_plan/tyuuki2.pdf

《資料C－1－①－ii：国立大学法人九州工業大学 25 年度年度計画（抜粋）》

[教育の質の向上に関する目標を達成するための措置]

- ① ミッション再定義の検討結果に基づき、今後強化すべき点を踏まえて改組計画を取り進め、必要に応じて入学定員の見直しを行う。
- ② ア 国際的技術者教育の水準を満たすための各部局の JABEE に関する計画を推進するとともに、国際的技術者教育向上のために、改善点があれば検討を行う。
 - イ 全学的な FD、SD の取組を継続するとともに、授業アンケート結果や学生の成績等をもとに、カリキュラムや個々の授業の継続的な改善を図るためのシステムの検討に着手する。
 - ウ TA を適切に配置するとともに、マニュアルの整備や研修を実施して、TA の質を向上させる取組を継続する。

(2) 国際化に関する目標を達成するための措置

- ① 国際交流協定校を拡充し、国際戦略に基づく各種取組を継続する。また、マレーシアサテライト拠点（仮称）を開設し、本学の国際拠点としての事業の開始に向けた準備に着手する。
- ② TOEIC 等による学生の学力段階の把握を推進し、新たな国際的コミュニケーション能力を涵養するため、学生寮における英語の特別プログラムや国際先端情報科学者養成プログラムを充実させる。

国立大学法人 九州工業大学 ウェブサイト

http://www.kyutech.ac.jp/information/plan/pdf_plan/nendokeikaku25.pdf

観点C-1-②： 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

(1) 国際的な教育環境の構築

①国際化に対応可能な組織体制の整備

1. 大学間国際交流や外国人学生の受入、国内学生の海外派遣等を推進するため、副学長（国際担当）や、国際戦略を検討・推進するための国際戦略室、事務組織に国際課を新設する等、学内組織を強化した。担当副学長の下、国際戦略室を中心に国際化の基本的指針となる九州工業大学国際戦略を新たに策定し、大学の国際化の方策について明確化した《資料C-1-②-i》。また、年度計画を立案するとともに、点検・評価により中期目標の達成状況を管理している。

2. マレーシア・プトラ大学の学内に海外教育研究拠点 MSSC を平成 25 年 4 月に開設した。平成 25 年度に派遣した学生数は、約 100 名である。また、プトラ大学との共同研究・博士後期課程学生 1 名の指導等を実施した。

3. 海外の各協定校との交流に関する実績報告書を毎年作成し、その結果に基づき、重点交流協定校、交流促進協定校を選定し、交流実績に見合った経費支援を行う仕組みを確立した。国際交流協定校は 2012 年度の 72 機関から 2013 年度 85 機関に、ダブルディグリー協定校は 4 校から 7 校に増加した《資料C-1-②-ii》。

4. 戸畑キャンパス内に「ランゲッジ・ラウンジ」を開設し、映画上映会等の開催により学生が楽しく英語を学べる環境を整備した。飯塚キャンパスにも附属図書館内に「ラーニング・コモンズ」を開設し、その中に「グローバル・コミュニケーション・エリア」を設け、学生が多言語・異文化理解を深める機会を提供した《資料C-1-②-iii》。

②教育内容・方法の国際化

1. ダブルディグリー協定校との交流を充実させるため、単位相互認定及び成績管理等の内容について学内関係者や相手方大学との調整を進め、具体的実施策を整備した。平成 25 年度に入学したダブルディグリー学生は 5 名、そのうち本学が単位を認定した学生は 2 名で、逆に本学から派遣した学生数は 1 名である。

2. 英語教育における TOEIC 等の標準的能力試験の受験や能力別教育については、各学部・学府・研究科において、既に導入済み若しくは導入に向けた実施計画案を策定した。全学的に TOEIC 受検料の半額を補助しており、工学部では単位認定化を実施、情報工学部では学生全員の受験を義務化し習熟度別教育に活用している。さらに、工学部では、一部の学科で 3、4 年生を対象に英語の e-ラーニング教材を利用した技術英語教育を試行した。

3. 教育の国際化を意識した FD を実施している《資料C-1-②-iv》。具体的には FD 活動で実績のあるヨーク大学と連携をとりながら、本学の FD 活動の評価を受けたり FD 活動に参加したりしている。これが教育改善活動調査へと広がり、各学科に広がる活発な改善活動を促進している。

4. 研究専門分野の教育に偏りがちになる大学院では、情報工学府で「総合英語ワークショップ」を新規開講した他、2013 年度にグローバルインフォマティクスリーダーズコースを新規開設し、初年度 6 名が登録している。

上述以外にも以下の活動を行っている。

1. 大学院授業におけるクォータ制の部分的導入や学部生の秋入学・卒業の検討
2. 技術者教育の国際標準に準じた学部教育システムの構築（JABEE）

(2) 外国人学生の受入

①外国人学生の受入実績

平成 23～25 年度の本学の外国人学生の受入数は、学部・大学院生ともに増加している。大学院では学生総数に

占める割合は毎年2%増加している。2013年度は大学院に在籍する学生の10%以上が留学生である。また、学部生では、その割合は1.7%となる《資料C-1-②-v》。

②教育課程編成・実施上の工夫

大学院では、英語での授業の実施(工学府19科目、情報工学府6科目)、クォータ制によるカリキュラム構築及び、ダブルディグリープログラムの推進による留学生対応の強化等の活動を行っている。

③外国人学生に対する各種支援

2012年度より留学生の授業料免除を日本人学生と別枠で実施するシステムを開始し、その支援総額は2012年度で約4,400万円である。《資料C-1-②-vi》また外国人学生に対する住居支援としてJICAと協定を結び、北九州市内にあるJICAの宿泊施設を本学留学生が利用可能とした。就職支援として、キャリアサポートセミナーを実施したほか、ビジネス日本語補講、求人の紹介等を実施した《資料C-1-②-vii》、《資料C-1-②-viii》。また経済産業省のアジア人材育成事業による留学生用の就職情報ウェブサイトにも本学も登録している。その結果2013年度で26名の留学生が国内で就職している。

また外国人留学生や研究者との窓口業務や海外の大学等との交流のため、外国語ができる非常勤職員を採用し、国際課に2名、情報工学部学生係に1名、工学部大学院係に1名を配置した。

④外国人学生の受入促進のための取組

1. 留学説明会を毎年3カ国程度で行い、各会場で100名程度説明している。
2. 台湾科技大学と米国のクラークソン大学との交流支援。
3. 国の公募事業である留学生交流支援制度(ショートステイ・ショートビジット)の事業に応募し、2011年度10件のプログラム(受入41名)、2012年度7件が採択された。
4. 国連宇宙部連携事業による博士後期課程留学生の受入れについて、2012年度、2名を受入れ、本事業について、文部科学省の2012年度国費外国人留学生の特別優先枠プログラムに申請・採択され、本学に5名を受け入れた。
5. 海外大学教員を対象にした博士後期課程留学生支援において、タイの大学の教員で本学の情報工学府博士後期課程に入学した留学生が2012年9月に修了し、また、2013年4月にはさらに1名の教員が入学した。

上述以外にも以下の活動を行っている。

1. ①チューターの配置による就学支援、②外国人宿舎の整備・あっせん、③カウンセリング、④外国人学生と地域との交流活動等を実施している。《資料C-1-②-ix》。
2. 短期留学生の受入れ
3. 長期留学生の受入れ

(3)国内学生の海外派遣

国内学生の海外派遣については、ダブルディグリー/ジョイントディグリープログラム(DDP/JDP)による派遣、短期海外派遣(単位互換制度等による海外派遣)、超短期海外派遣学生(サマプロ)等の活動を行っている。具体的な内容及び人数は下記に示す。海外留学希望者への説明会は、経済支援の有無の説明も含めて実施している《資料C-1-②-x》。平成21年度以降の本学の学生海外派遣入数は、学部・大学院生ともに増加傾向にある。平成23年度は159名であったが、平成25年度では236名である《資料C-1-②-xi》。詳細を下記に示す。

①DDP/JDPによる海外派遣学生

DDP/JDPを整備し、平成25年度にプトラ大学への1名の実績がある。

②短期海外派遣学生（単位互換制度等による海外派遣学生）

ウーロンゴン大学、プトラ大学などの交流協定校において単位互換制度を利用した数ヶ月程度の短期海外派遣を行っている。平成23年度は36名、平成24年度は6名、平成25年度は25名の学生が派遣されており、58名が単位認定されている。《外国人学生受入・国内学生海外派遣実績票の様式4》。

③超短期海外派遣学生（サマプロ）

1. 国際先端情報科学者養成プログラム(IIF)の推進

情報工学部で行われているIIFでは、5学科から約25名を選抜して、1年次の語学研修に続き、3年次に数週間程度の海外派遣を行っている。平成23年度に32名、平成24年度に20名、平成25年度に15名派遣が実現している《外国人学生受入・国内学生海外派遣実績票の様式4》。

2. 国内学生のその他の超短期派遣

留学生交流支援制度や重点交流協定校等で国内学生の派遣を行っている。その結果、学部生で平成23年度に25名、24年度に42名、25年度に65名派遣している。また大学院生では平成23年度に63名、24年度に40名、25年度に129名派遣している。

(4) 国内学生の英語力強化に関する一連の取組み

外国語による授業科目を開設し、留学生と共に受講できるようにしている。宇宙工学国際コースでは2013年度19名が19科目の中から受講している《資料C-1-②-xii》、《資料C-1-②-xiii》。

【分析結果とその根拠理由】

国際的な教育環境の構築について、協定校から重点交流協定校、交流促進協定校を選定し、交流実績に見合った経費支援の仕組みを確立したことや、海外インターンシップ派遣先の拡大・海外教育研究拠点(MSSC)におけるデュアルディグリープログラムを実施した。

外国人学生の受入については、外国人学生に対する各種支援などを通じて平成23年度から25年度の受入数が学部生・大学院生とも増加している。3年間の平均は全学で4.4%であり、一般的な水準以上にある。

国内学生の海外派遣は超短期海外派遣学生を中心に平成21年度以降、増加傾向にある。これらは観点C-1-①に示した本学の教育の国際化の計画に基づいており、適切に実施されている。3年間の平均は全学で2.5%であり、一般的な水準以上にある。

《資料C－1－②－i：国際戦略室ミーティングの開催回数》

年 度	開催回数	主な審議内容	備 考
平成 22 年度	5 回	・大学間交流協定の締結について ・国際戦略の策定について ・年度計画の作成及び評価について ・日本留学フェアの参加について ・重点交流協定校、交流促進協定校の選定について ・国際関係公募事業への申請について	国際戦略室は、平成 22 年 6 月に設置
平成 23 年度	7 回		
平成 24 年度	9 回		
平成 25 年度	7 回		

《資料C－1－②－ii：国際交流協定校と外国人学生受入の数の推移》

	平成 25 年度	平成 24 年度
国際交流協定校 (校)	8 5	7 2
外国人学生受入人数 (人)	2 7 7	2 4 5

国際交流協定校内訳（平成 25 年度）

	件 数	機 関 数
大学間	43	43
学部間等	43	42
計	86	85

《資料C－1－②－iii：ランゲッジ・ラウンジ》

別紙の通り

《資料C－１－②－iv：教育の国際化を意識したFDの実施状況》

教育の国際化を意識したFDの実施

2012年の夏に海外の大学のFD活動を調査するため、韓国の交通大学校を訪問し、同大学のFD事業や支援体制について説明を受け、今後の積極的な交流が期待できる訪問となった。

また、2011年度に英国の大学で学生幸福度が最も高かったエクセター大学の視察、ヨーク大学での教員研修プログラムに工学部から2名の参加など、海外の状況視察や研修を行い、情報収集を行った。

2011年度末には、前年度訪問インタビューしたヨーク大学FD担当者Dr Duncan Jacksonが来訪し、本学のFDの取組みについて、外部評価を受けた。たとえば現行の授業アンケートで「高い授業満足度」を示していることを広報的に発信すべきとの提言に加え、フォーカス・グループによるワークショップ型FDの有効性が提示された。

2012年度の3月に実施したヨーク大学FD研修では、前述のDr Jacksonのコーディネートで、本学から参加した3名の教員がヨーク大のフォーカス・グループのFD活動へ実際に参加して研鑽を積んだ。この時もフォーカス・グループ（FD室）の活動をさらに強く意識する重要性についてDr Jacksonからの助言が得られた。これらの研修を通じて、組織的FDにおけるワークショップ型の活動の新しい見地を開いてきたことが、本学FD活動におけるこれまでの大きな成果となっている。

また、海外研修の成果は、年度初めにFD室で全学的に共有され、次年度の企画・立案に活かされている。H25年度はワークショップの開催回数を増やして、さらに活動を広げたい。海外研修によって、通常の授業アンケートや公開授業というパッケージ型のFDから、フォーカス・グループのワークショップ型FDという、いわば「内発的なFD活動」が定着しつつある。

※（資料1）：学習教育センター会議資料

《資料C－１－②－v：外国人学生受入実績票》

外国人学生受入実績票

外国人学生受入【全体】

学部	H25年度			H24年度			H23年度			3年平均		
	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率
正規留学生（※）	4,283	29	0.7%	4,341	29	0.7%	4,323	32	0.7%	4,316	30	0.7%
短期留学生・超短期留学生		45	1.1%		39	0.9%		37	0.9%		40	0.9%
合計	4,283	74	1.7%	4,341	68	1.6%	4,323	69	1.6%	4,316	70	1.6%

大学院	H25年度			H24年度			H23年度			3年平均		
	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率
正規留学生（※）	1,593	175	11.0%	1,631	142	8.7%	1,728	120	6.9%	1,651	146	8.8%
短期留学生・超短期留学生		57	3.6%		43	2.6%		40	2.3%		47	2.8%
合計	1,593	232	14.6%	1,631	185	11.3%	1,728	160	9.3%	1,651	192	11.7%

全学	H25年度			H24年度			H23年度			3年平均		
	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率	在籍者数	外国人学生数	外国人学生比率
正規留学生（※）	5,876	204	3.5%	5,972	171	2.9%	6,051	152	2.5%	5,966	176	2.9%
短期留学生・超短期留学生		102	1.7%		82	1.4%		77	1.3%		87	1.5%
合計	5,876	306	5.2%	5,972	253	4.2%	6,051	229	3.8%	5,966	263	4.4%

※ ダブル・ディグリー／ジョイント・ディグリー・プログラムによる留学生含む。

《資料C－１－②－vi：留学生の授業料免除の人数》

	平成24年度（2012年）				平成23年度（2011年）			
全・半額	全額免除		半額免除		全額免除		半額免除	
前・後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
人数	70	68	36	40	12	14	85	88

平成23年度と24年度で留学生の全額免除率が大きく異なる理由は、既存の授業料免除制度が相対的に判断して留学生に不利な制度であると学生委員会委員からの指摘を受け、24年度から授業料免除予算を日本人学生と留学生用に二分し、それぞれで選考処理を行う方法に変更したためです。

《資料C－1－②－vii：ビジネス日本語補講の実施状況(2013 年度)》

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
回数	戸畑	2	5	4	2	0	0	4	4	3	3	1	0	28
	飯塚	3	3	3	4	0	0	4	3	3	4	1	0	28
	小計	5	8	7	6	0	0	8	7	6	7	2	0	56
人数	戸畑	9	19	13	5	0	0	26	26	17	9	2	0	126
	飯塚	9	4	6	8	0	0	12	10	9	12	2	0	72
	小計	18	23	19	13	0	0	38	36	26	21	4	0	198

《資料C－1－②－viii：留学生交流支援制度（2012 年度）》

	プログラム名	受入れ	派遣
1	機械情報工学分野の泰・日留学生の交流および国際ワークショップ	8	6
2	日米ものづくり技術交流プログラム	3	3
3	サンティエンヌ国立高等鉱山学院との共同による材料開発の国際的技術者養成プログラム	0	5
4	昌原大学校との学生交流プロジェクト	15	0
5	省エネ・環境技術に関する留学生交流プログラム	7	0
6	台湾科学技術大学との学生交流プロジェクト	4	4
7	日本-台湾 企業におけるインターンシップを通じた技術体験プログラム	4	2
		41	20

《資料C－1－②－ix：平成23年度から25年度までの外国人学生宿舎の戸数・入居者数》

地域	宿舎名	H25 年度（＊）	H24 年度	H23 年度
戸畑	国際交流会館（45室）	43人	41人	44人
飯塚	国際交流会館（18室）	17人	13人	14人
	スチューデント・レジデンス（43室）	26人	22人	5人

（＊）H25は5月1日までの状況

《資料C－1－②－x：留学説明会》

別紙の通り

《資料C－1－②－xi：国内学生海外派遣実績票》

国内学生海外派遣実績票

学部	H25年度			H24年度			H23年度			3年平均		
	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率
海外派遣学生（※）	4,283	98	2.3%	4,341	62	1.4%	4,323	89	2.1%	4,316	83	1.9%
大学院	H25年度			H24年度			H23年度			3年平均		
	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率
海外派遣学生（※）	1,593	139	8.7%	1,631	49	3.0%	1,728	70	4.1%	1,651	86	5.2%
全学	H25年度			H24年度			H23年度			3年平均		
	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率	在籍者数	派遣学生数	派遣学生比率
海外派遣学生（※）	5,876	237	4.0%	5,972	111	1.9%	6,051	159	2.6%	5,966	169	2.8%
※ ダブル・ディグリー／ジョイント・ディグリー・プログラムによる海外派遣学生、 短期海外派遣学生及び超短期海外派遣学生の合計。												

《資料C－1－②－xii：国内学生を対象とした外国語による授業科目の開設状況》

国内学生を対象とした外国語による授業科目の開設状況

- 工学部、情報工学部 開講なし
- 工学府

宇宙工学分野でのグローバル人材育成を推進するため、宇宙工学国際科目として、英語で講義等を行う科目を開講し、宇宙工学国際科目を中心に履修する「宇宙工学国際コース」を設置した。留学生を対象としたコースであるが、国内学生も受講可能としている。

2013年度履修者数

	博士前期	博士後期	計
4月入学日本人学生	8	1	9
留学生	1		1
10月入学日本人学生		1	1
留学生	5	3	8
	14	5	19

工学府では、2013年4月から

宇宙工学国際コース(Space Engineering International Course, SEIC)を開講

SEICは、以下の4項目からなる。

- ・各専攻の指導教員の元での修士論文または博士論文に関する研究
- ・宇宙環境試験等の実践を通じた On-the-Job Training
- ・留学生・日本人の共同作業で宇宙プロジェクトを行なう Project Based Learning
- ・英語による体系だった宇宙工学関連の講義

資料C-1-②-x iii:

宇宙工学国際科目一覧(2012年12月3日時点)

科目名	担当教員	単位	備考
宇宙システム工学	白木	2	
衛星工学入門	趙	2	
宇宙環境試験	趙	2	
宇宙環境技術特論	豊田・趙・赤星・木元・越石・岩田	2	
衛星電力システム特論	野崎・今泉・内藤・島崎・舩分・趙	2	
エネルギー工学特論	豊田	2	
宇宙構造材料特論	奥山	2	
スペースダイナミクス特論	平木	2	
高速気体力学特論	坪井	2	
推進学	橘	2	
航空宇宙の誘導制御学特論	米本	2	
高速衝突工学特論	赤星	2	
半導体デバイス工学特論	大村	2	
熱輸送特論	宮崎	2	
Japanese for Beginners	石束	1	留学生のみ必修
英語Ⅲ	ラックストン	1	留学生以外は必修
宇宙環境試験ワークショップ	TBD	1	博士前期は必修
実践的システム工学(設計)	開発プロジェクト担当教員	4	博士前期は必修
講究	指導教員	2	各専攻(博士前期のみ)
特別実験	指導教員	2	各専攻(博士前期のみ)
学外実習	指導教員	最大2	各専攻(機械知能工学専攻は機械工学学外実習)
学外演習	指導教員	最大2	
特別演習	指導教員	1	博士後期課程のみ
インターンシップ or 学外研修	指導教員	1	博士後期課程のみ
プロジェクト研究	指導教員	2	博士後期課程のみ

※ (資料2) 参考URL: <http://space-academy.ele.kyutech.ac.jp/space.html>

観点 C-1-③： 活動の実績及び学生の満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。

【観点到係る状況】

(1) 国際的な教育環境の構築

本学で TOEIC の受検を支援しているが、受検者の得点の平均点は入学時から確実に上昇している。新入生が多く受検する 4 月時点での平均点は、365～385 点であるが、その後の受検では平均点は 400 点以上に向上する。特に、大学院入試に TOEIC を導入しているため、学部 4 年生の受検が多い 6 月の試験の平均点は 440 点まで上昇する。また年度ごとに緩やかではあるが、平均点は増加している。これは、本学の語学力向上のための仕組みが機能していることを示している《資料 C-1-③-i》。

また、グローバル・エンジニア養成のための IIF プログラムとして開講した授業が毎年 18 科目実施され、授業履修生の 88.8% が単位を修得している《資料 C-1-③-ii》。

本学の卒業生は、グローバル展開を行っている企業に多く就職している《資料 C-1-③-iii》。学生の希望が多い有名企業 400 社に限った就職率ランキングでは、中四国・九州の大学で 1 位、全国の大学でも 16 位の高さである《資料 C-1-③-iv》。

(2) 外国人学生の受入

留学生の受入のため、外国人学生宿舍の整備、留学生支援のための職員配置、外国人学生と地域との交流活動の支援等を可能な限り実施してきた。平成 25 年度は、過半数の学部留学生が外国人学生宿舍に入居している《資料 C-1-③-v》。これらにより留学生は快適な学生生活を送ることができ、本学や日本国に対するイメージ向上に大きく貢献している。これらは、本学を修了した留学生のアンケートから読み取ることができる《資料 C-1-③-vi》。

(3) 国内学生の海外派遣

工学部から海外の大学に派遣された学生のレポートやアンケートから、専門分野の研究や語学力向上だけでなく、異文化理解にも大きな成果があがっていることがわかる《資料 C-1-③-vii》。また、情報工学部の IIF プログラムでは、履修学生の TOEIC の得点が入学時より平均で 205 点向上している《資料 C-1-③-viii》。これは、《資料 C-1-③-i》で示した情報工学部の学生の得点の伸びを大きく上回っている。また、IIF プログラムに最後まで参加した学生はほぼ全員大学院に進学しており、修了後の進路はグローバル事業を展開する企業に就職している《資料 C-1-③-ix》。

【分析結果とその根拠理由】

本学の卒業生は、グローバル事業展開を行っている大手製造業に多くの学生が就職しており、学生の希望が多い有名企業への就職率ランキングは高いレベルにある。これらの実績は、本学の国際的な教育環境が適切に構築され、そこでの教育が高く評価されていることの表れである。また、海外に派遣した学生のレポート等から、異文化理解等に対する教育効果が高いことを確認できる。IIF プログラムでは、TOEIC 得点結果から大幅な英語力向上が見られており、学生の海外派遣に関する教育の国際化の成果もあがっていると判断できる。留学生の受入に関しても、勉学に関する成果のみならず、日本文化への理解を深めることにも役立っており、国際化の成果が得られている。

《資料C－1－③－i：TOEIC 受検者全員の平均点》

TOEIC受検者平均点の推移（情報工学部）

	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	平均点
4月	368	365	381	385	385	377
6月	413	436	435	467	453	441
10月	399	400	426	421	429	415
12月	387	439	442	409	454	426
1月	392	399	406	412		402

《資料C－1－③－ii：2011年度から2013年度までのIIFプログラムの授業科目に関する単位修得状況》
別紙の通り（2013年度については、2013年12月末現在）

《資料C－1－③－iii：2011年度から2013年度までの就職先企業》
別紙の通り

《資料C－1－③－iv：有名企業400社に限った就職率ランキング》
別紙の通り

《資料C－1－③－v：学部学生 of 外国人学生宿舎への入居率》

学部	正規生/ 非正規生	平成25年度前期				平成25年度後期			
		大学宿舎入居者数		学部留学生人数	入居者の割合	大学宿舎入居者数		学部留学生人数	入居者の割合
		国際交流会館	明専寮/SR			国際交流会館	明専寮/SR		
工学部	正規生	1	1	16	12.50%	1	1	16	12.50%
	非正規生	18	0	19	94.74%	17	0	18	94.44%
情報工学部	正規生	4	4	13	61.54%	0	4	13	30.77%
	非正規生	3	2	5	100.00%	2	4	6	100.00%
両学部合計		26	7	53	62.26%	20	9	53	54.72%

《資料C－1－③－vi：留学生の本学留学に関するコメント（抜粋）》

- During my time at KIT, I have had a lot of friends who come from various countries in the world. They are all very kind, friendly and always there to help me whenever I need their helps. For the last 3 years, I have played futsal with another foreigner students every week on Saturday, and it was very fun. Beside, sometime I was able to join some events held by KIT with other Japanese and also foreigner student, such “Ocha Kai”, “Omochi Tsuki”, and it was very wonderful. I would like to express my deep gratitude to my advisor, Prof. Nobuyama for his supports and guidance during my time at KIT. I also would like to thank Assoc. Prof. Saito for his constant supports, discussion even at night and his vacation during my graduate time.

- It is strongly believed that the time I studied in KIT is unforgettable in my life. During this time, I attended several classes, such as Computer Networks, Algorithm, Electronic Circuit, Robotics, as well as Japanese. I found all of these classes are very interesting and enjoyable. My laboratory’s friends are very kind. I would like to thank them, especially my tutor for being ultimately helpful during the last five months. I also want to express my gratitude to my advisor, Associate Professor Niimi for his constant support and help. I believe that if I return to Vietnam, I will miss them very much.

- Miss Hirata is a very kind and helpful Japanese teacher. I enjoy her class very much and learnt a lot about Japanese conversation. Lab teacher, Nishino-Sensei, is very thoughtful and taking great care of us. He makes us feel warm and welcomed all the time.

- I have no problem staying in Japan. Although this is my first time go outside of my country. The goods here are more expensive to be compared with Malaysia. Sometimes I don't have enough money. So far, I'm easily making friend with Japanese. Yuko-san also helps me in making friends. Teachers in KIT are so kind.

- Everyone was always really friendly and easy to talk to. They always had time to help us out if we needed it. All the activities arranged for the exchange and the foreign students were always super fun and interesting.

- Activities are always well organized by Yuka-san and highly involve exchange students. KIT life also gained a lot of experiences from activities such as international students party, BBQ party, making mochi, visit Toyota factory and aquarium. Laboratory is very available and welcoming for our visit every time and I always have great time with all the Japanese students in the lab.

- I lived in Student Residence (SR), which has perfect size in living room and bedroom. The building is quite new and all facilities are in good condition and convenient. Horie-san is very helpful and patient with students about everything regarding to dormitory. Had a great experience living in SR.

- Overall it's a really nice stay in KIT. Looking forward to share with my friends and promote this beautiful KIT and Japan.

《資料C－1－③－vii:海外派遣学生の感想文（抜粋）》

- ・韓国に行くまでは日本人に対して冷たいんじゃないかと少々ながら不安でした。ですがパートナーの人と交流していく上でその考えは大きく覆りました。韓国の方はとても親切で心が温かくお話が好きで積極的ということを感じました。
- ・私のパートナーは日本語を話せたがそれでも意味が伝わらないと思うことがあったので英語を使って会話していた。また、日本語が全く使えない友達には英語のみでコミュニケーションをとった。たとえ日本語が使えなくても自分の言いたいことや感情は伝わるし、中学校レベルの英語が使えるのならそれだけで会話ができることを実感した。
- ・言葉を話す、言葉が通じる、言いたいことが伝わる、ということは日本国内では当たり前のことですが、いかにそれが大切なことで難しいことなのかを理解することができました。言葉を話せるってすごいことだな～とも思えました。日本人とはちょっと違う考えをもっていたり、違う文化を教えてくれたり、そのツールとなる言語は今後のグローバル化される社会のなかでは非常に大切なものになってくるだろうなと思います。そう考えると、大学生活が始まったばかりのこの時期にこうやって自信をつけさせてもらえたということは非常に大きいことなのではないかと思います。
- ・今回の研修は1週間にも満たない短い期間でしたが、とても充実していました。研修を通して一番良かったと思うことは、外国語を使ってコミュニケーションがとれた時の喜びを感じることができたことだと思います。日本にいと外国人とコミュニケーションをとる機会が少ないため、英語を勉強してもそれを活かさずにいました。もちろん、私が英語を流暢に話せるかといえば、決してそうではありません。しかし、だからこそ、言いたいことが伝わった時の喜びも大きかったのではないかと思います。

《資料C－１－③－Ⅷ： IIF プログラム履修生の TOEIC 得点の推移》

IIF プログラム履修生の TOEIC 得点の変遷

IIF プログラム運営委員会

2012 年 3 月

2008 年度入学生(9 名)

学生	2008年 4 月	2009年 1 月	2010年 1 月	2010年 6 月	2010年 10 月	2010年 12 月	2011年 1 月	2011年 4 月	2011年 10 月	最高点と入 学時との差
A	460	535	540	n/a	n/a	670	n/a	n/a	n/a	210
B	355	545	470	n/a	515	n/a	535	n/a	560	205
C	520	505	540	565	610	n/a	555	n/a	n/a	90
D	465	n/a	540	n/a	620	n/a	n/a	n/a	n/a	155
E	470	565	520	n/a	535	n/a	485	610	545	140
F	410	395	455	n/a	535	n/a	560	n/a	715	305
G	415	525	570	n/a	620	n/a	n/a	n/a	n/a	205
H	340	410	455	n/a	590	n/a	595	n/a	525	255
I	425	500	470	n/a	705	n/a	n/a	n/a	645	280
平均	429	498	507	565	591	670	546	610	598	205

入学時と比較して

- ・ 全体で平均 205 点の得点上昇
- ・ 全員(9 名中 9 名)が得点上昇
- ・ 約 89%(9 名中 8 名)が 100 点以上得点上昇
- ・ 約 67%(9 名中 6 名)が 200 点以上得点上昇
- ・ 約 11%(9 名中 1 名)が 300 点以上得点上昇
- ・ 約 78%(9 名中 7 名)が TOEIC スコア 600 点以上

(備考) 全員が大学院へ進学

《資料C－１－③－Ⅷ： IIF プログラム一期生（平成 26 年 3 月博士前期課程修了）の就職先》

- IT 系企業： NEC, 日本総合研究所
- 総合電機メーカー系： 三菱電機, 東芝テック
- 自動車メーカー： スズキ
- 半導体関連企業： アドバンテスト, 凸版印刷
- 医療用機器： アークレイ

観点C-1-④： 改善のための取組が行われているか。**【観点到係る状況】**

教育の国際化に関する中期目標・中期計画について、年度ごとに国際戦略室や教育委員会にて活動実績を自己点検・評価し、その結果は大学評価委員会の検討を経て、役員会で決定している。明らかになった課題は、次年度以降の年度計画の内容に改善案として反映させている。また、大学機関別認証評価等の第三者評価により、改善に向けた取り組みを客観的なものに行っている《資料C-1-④-i》。例えば、大学機関別認証評価で「大学院博士前期課程の学府においては、入学定員超過率が高い。」と改善点を指摘され、この問題が正規生の留学生受入の妨げになる可能性もあった。そこで、全学的に入学定員の超過率の上限を設け、各部署で対応する定員管理措置を講じることで、入学者数を入学定員に対して決められた範囲内に納めている《資料C-1-④-ii》。

外部の意見を教育に取り入れるため、修了生や企業からアンケート等社会からの要請を考慮しながら教育の国際化に関する施策を検討し、学府改組におけるカリキュラムや新たな教育プログラムに反映している。例えば、修了生アンケートで、英語による講義の要望が高い結果が示された《資料C-1-④-iii》。更に企業アンケートにより、「外国語によるコミュニケーション能力」への評価について、「劣る・やや劣る」の比率が高かった《資料C-1-④-iv》。そこで、工学府と生命体工学研究科では、2014年度から適用される大学院改組において、学生の国際性を高める取り組みを具体化し、履修モデルに組み入れている。養成する人材像として、工学府では「国際社会で戦えるリーダーシップ」、生命体工学研究科では「国際社会で戦えるリーダーシップとコミュニケーション能力、異文化を理解し新しい価値を生み出す能力」の獲得という達成目標を定め、国際交流協定校やMSSCと密接に連携しながら、国際インターンシップ等によるグローバルマインド強化や能力向上を図っている《資料C-1-④-v》。その結果2013年度以前に比べて生命体工学研究科では、MSSCの活用を含めた国際化のプログラムが強化される体制が構築できた。また大学院情報工学府では2013年度より英語によるコミュニケーション能力強化のための科目「総合英語ワークショップ」を新規開設した他、グローバルインフォマティクスリーダーズコースを新規開設し、国際感覚に優れたグローバルリーダー養成を推進している《資料C-1-④-vi》。

海外の大学との国際交流協定について、締結までの手続きの明確化のための見直しを行なったほか、各協定校との交流状況を把握するため実績報告書の統一様式を作成した《資料C-1-④-vii》。国際交流協定校は平成23年度の72機関から25年度85機関に、ダブルディグリー協定校は4校から7校に増加している。

学部の教育システムは、社会の要求水準を満たしているかを国際的な同等性を持つ認定基準に基づいて認定するJABEEへの申請を行い、これまでに申請を行った情報工学部の全学科と工学部の応用化学科は継続してJABEE認定を受けている《資料C-1-④-viii》。これは、JABEEの要求する基準にしたがって教育プログラムの継続的改善ができるシステムが構築され、機能していることを示している。

【分析結果とその根拠理由】

大学の基本方針を定めた中期目標・中期計画に、大学の国際化に関する項目を設け、年度毎に、中期目標・計画の達成・進捗状況の評価を組織的に実施し、改善可能な仕組みを構築している。具体的な改善内容についても、大学機関別認証評価等や、修了生や企業からのアンケートに教育の国際化の取り組みを改善していくために必要な設問を設け、その結果より、大学全体または部署毎に適切な改善計画や改善の方針を策定し、順次実施している。学部教育の継続的改善においても、JABEEによる検証で、これまでに6学科がワシントン協定に基づく技術者教育の国際的同等性を保証されている。これらのことから、改善への取り組みが継続的に行われていると判断できる。

《資料C－1－④－i：第三者評価の評価結果例》

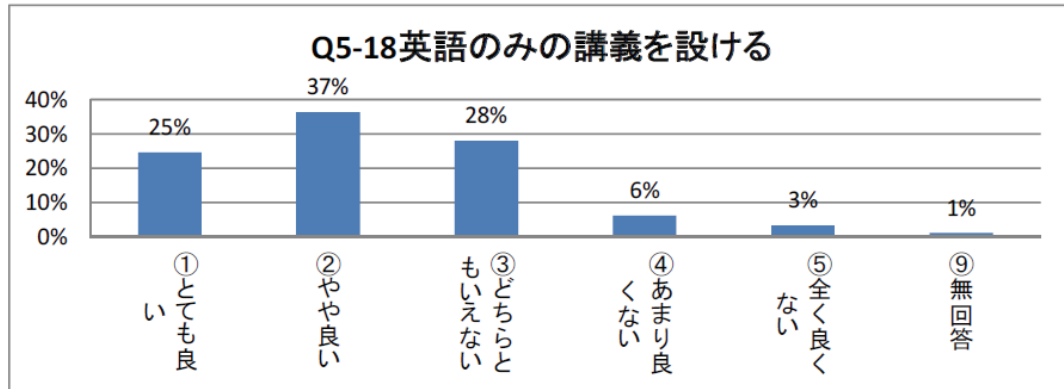
別紙の通り（大学機関別認証評価報告書，外部評価報告書）

《資料C－1－④－ii：大学機関別認証評価の評価結果への対応例》

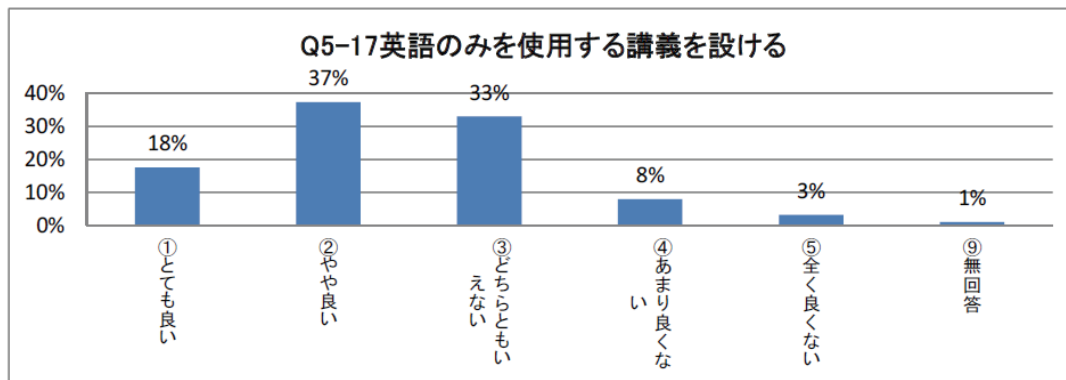
別紙の通り（入学試験委員会議事要旨，情報工学府における入学定員管理について（報告），大学院博士前期課程定員充足状況）

《資料C－1－④－iii：平成22年度から24年度までの修了生アンケート結果（抜粋）》

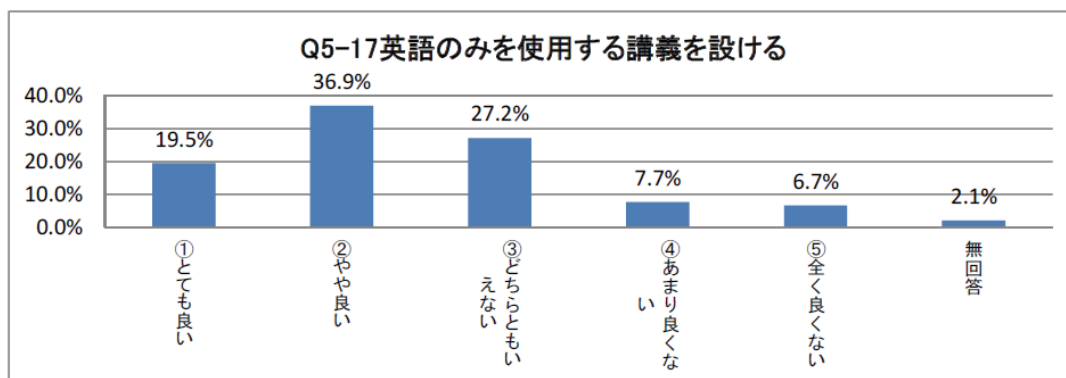
平成22年度



平成23年度

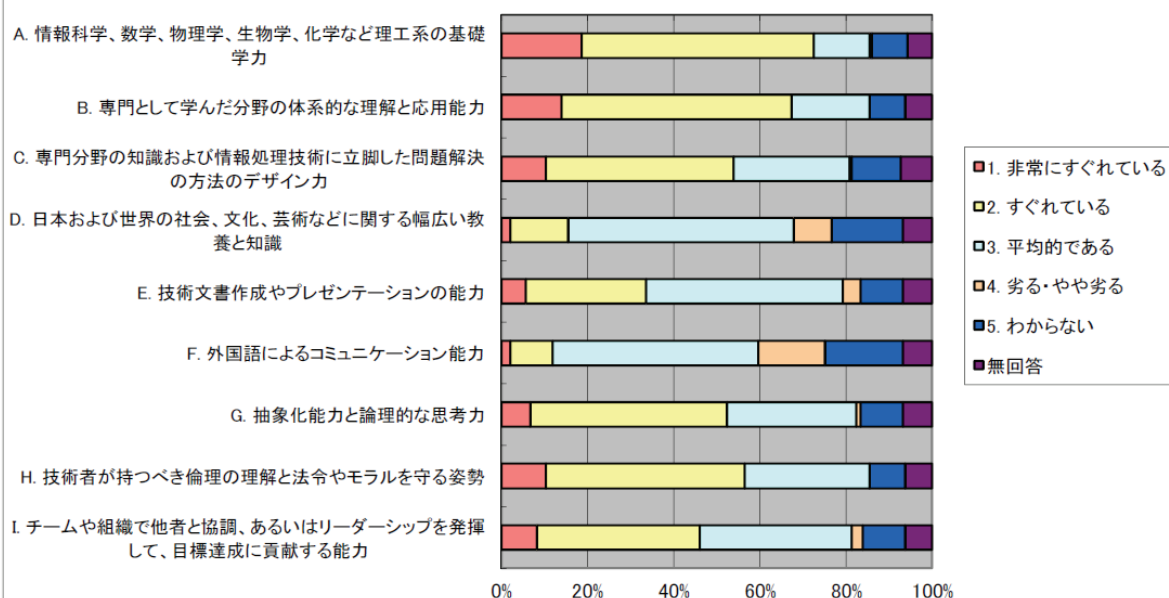


平成24年度



《資料C－1－④－iv：平成23年度企業アンケート結果（抜粋）》

質問2 九州工業大学情報工学部の卒業生についての評価をおたずねします。下記の項目A～Jに、それぞれ右の選択肢から最もよくあてはまる標語を一つ選び番号を○で囲んでください。新卒者一般と比較してお答えいただければ結構です。

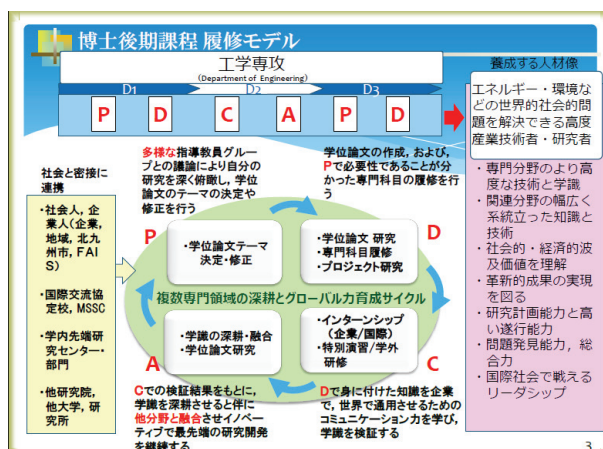
質問2 九州工業大学情報工学部卒業生について

平成23年度企業アンケート(有効データ数:193)

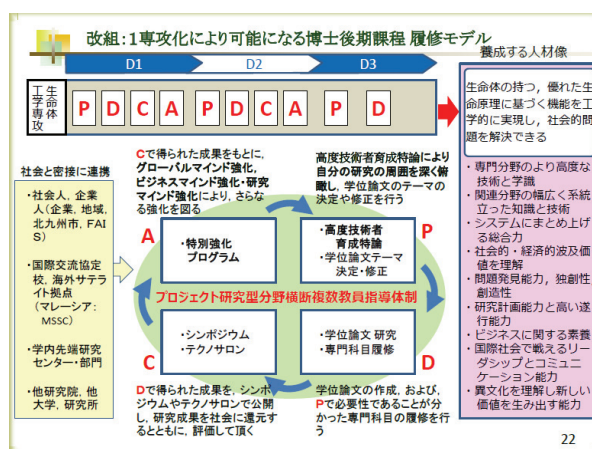
項 目	1. 非常に すぐれている	2. すぐれ ている	3. 平均 的である	4. 劣る・ やや劣る	5. わから ない	無回答	合計
A. 情報科学、数学、物理学、生物学、化学など理工系の基礎学力	36	104	25	1	16	11	193
B. 専門として学んだ分野の体系的な理解と应用能力	27	103	35	0	16	12	193
C. 専門分野の知識および情報処理技術に立脚した問題解決の方法のデザイン力	20	84	52	1	22	14	193
D. 日本および世界の社会、文化、芸術などに関する幅広い教養と知識	4	26	101	17	32	13	193
E. 技術文書作成やプレゼンテーションの能力	11	54	88	8	19	13	193
F. 外国語によるコミュニケーション能力	4	19	92	30	35	13	193
G. 抽象化能力と論理的な思考力	13	88	58	2	19	13	193
H. 技術者が持つべき倫理の理解と法令やモラルを守る姿勢	20	89	56	0	16	12	193
I. チームや組織で他者と協調、あるいはリーダーシップを発揮して、目標達成に貢献する能力	16	73	68	5	19	12	193

《資料C-1-④-v: 大学院改組における履修モデル》

工学府の改組の取り組み



生命体工学研究科改組の取り組み



《資料C-1-④-vi: GIL コース概要》

グローバルインフォマティクス リーダーズ育成プログラム Global Informatics Leaders Program (GIL プログラム) 2013年4月5日 大学院情報工学研究院 梶原誠司	【プログラムの学習・教育目標】 - 専門分野における国際コミュニケーション能力の修得 - 情報工学及び各専門分野に関して、国際的に通用する最先端の専門技術を修得すると共に、これらについて英語と日本語でコミュニケーションできる能力を修得する。 - グローバルリーダーとしての資質の涵養 - リーダーとして国際的に活躍するために、マネジメント、リーダーシップ、企業活動に関する知識及び能力を修得する。 - 多様な異文化理解能力の涵養 - 日本の歴史・文化への造詣を深めると共に、異文化を理解・尊重するための知識及び能力を修得する。
【カリキュラム：博士前期課程】 - 情報工学府で開設される他のコース（本コース以外のコース）を1つ以上修了する。 - グローバル理工学モジュール（4単位・新設）：以下から修得 - 本学の外国語による大学院講義・演習科目 - 海外の大学での外国語による情報工学・理工学系科目 - 外国語による情報工学・理工学系分野のサマースクール参加 - グローバルマネジメントモジュール（4単位・新設）：以下から修得 - 外国人講師によるマネジメント系科目（1～2単位）（必修） - 海外インターンシップ（新設、1～2単位） - 情報工学系関連セミナーの修得（1～2単位・新設）（特別講演、明導塾、各種セミナー、明導スクール（内定決定後）、企業の講師による対話型の授業（キャリア形成模範の大学院版）等 - 人間科学モジュール（4単位）	【プログラム学生募集・選抜方法】 - プログラム募集定員 - 最大10名程度まで - 応募者多数のときは、学部GPAとTOEICスコア等を参考に選抜する。 - 履修生には、別途連絡します。 - プログラム進級要件 1年次終了時点で、専門コース修了要件の半数、本コース修了要件の単位数の半数をそれぞれ修得済みであること。 【その他】 - 海外派遣では、学内外の各種制度を利用した、旅費の補助を予定しています。 - 今年度開始のプログラムのため、試行的な運用となります。

《資料C－1－④－vii:海外大学等との交流協定見直しについて》

別紙の通り

《資料C－1－④－viii: JABEE 認定校》

別紙の通り (JABEE ホームページより抜粋)

(2) 目的の達成状況の判断

本学の教育の国際化に関しては、中期目標を受けて定められた中期計画および年度計画で具体的な方策を示している。そしてこれはウェブサイトなどで公表している。

特徴のある各取組を実施し、協定校の増加、学生の語学力向上や新規プログラムの策定等、着実に成果を上げている。またアンケートでも学生派遣や受入の効果が上がっていることを確かめている。

関連の委員会では前年度の資料を基に実施が適切であるか検討して、問題点の改善を行うと共に、新しいニーズを踏まえた新しい施策にも取り組んでいる。

以上のことから、目的の達成状況は極めて良好である。

(3) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

- ・マレーシア・プトラ大学内に海外教育研究拠点(MSSC)を2013年4月に開設し、プトラ大学との教育研究交流をより一段と活性化させた。MSSCに関係するさまざまなプログラムにより教育の国際化が大きく進展した。
- ・3つの部局にそれぞれ特有な教育の国際化を進めるプログラムが複数あり、中期目標・中期計画の策定から始まるPDCAサイクルにより改善をしながら継続的に事業を進めている。

【改善を要する点】

- ・全学においても3つの部局においても、年々必要とされる事業が拡大傾向にあり、それをサポートする予算が十分でない。したがって、文部科学省特別事業などの外部からの予算の獲得が必要である。これまでの実績をきちんと示し、今後の計画を新しいアイデアを入れて提案する必要がある。
- ・留学生の受入のための宿舎の整備を進めているが、今後の受入数の伸びを考慮した整備計画が必要である。
- ・教育の国際化をおこなうためのさまざまなプログラムを支援するスタッフが十分でない。そのために、年々増大する事務手続きなどに忙殺されて、新しいプログラムの立ち上げなどに支障をきたす恐れがある。より多くの部署に理解を得て教育の国際化に支援を求める必要がある。
- ・国際化に関する業務は、教育・研究・入試・広報等多岐に亘るため、学内のシステムを改善し、より効率の高い運営ができるようにする。